

川添登の執筆活動にみる領域横断的視座の再評価 —思想形成期における交流関係と生活学との関わりについて—

Re-evaluation of the cross-disciplinary perspective in Noboru Kawazoe's writing activities relationship between exchange and life sciences in the period of thought formation

○川股悠大¹, 田所辰之助²

*Yudai Kawamawata¹, Shinnosuke Tadokoro²

Noboru Kawazoe, known for serving as the editor-in-chief of the magazine “Shinken-chiku” in 1953-7. His greatest feature is that it has a unique perspective across academic disciplines that is seen in more than 2000 references that have been involved throughout his life. However, many of his current evaluations are over time. I considered that he was active based on some big theme and thought in his writing activities. This time, we investigated the period of thought formation and found out that Kawazoe's life sciences side was born by meeting with Kon Wajiro. This is reflected in the establishment and management of the Japan Society for Life Studies and research on Ise Jingu, which has developed into a book on civilization.

1. はじめに

1953年～1957年に川添登(1926～2012)が編集長を務めた雑誌『新建築』は現在とは異り、他分野の識者や読者を巻き込み評論を展開するようなものだった。

そして、川添の論述には伊勢神宮の研究などに見られる文明論的なものや心理学などによるものなど、建築学だけでは収まらない学問の領域横断的な特徴が見られる。今回の研究では、そういった思想が形成された時期について交流関係による分析を行う。

2. 川添との4つの対談

川添個人についての研究については報告されいない。そこで、川添の現評価として以下の4つを提示する。

1) 「戦後モダニズムを振り返る建築の軌跡・丹下健三とその時代¹⁾」 話し手 川添登 聞き手 藤森照信 『新建築』 1998年3月

2) 「仕掛け人としての伝統論争 戦略としてのスター主義²⁾」

話し手 川添登 聞き手 大川三雄 『建築ジャーナル』 1995年5月

3) 「川添登オーラル・ヒストリー 2009年3月24日³⁾」

4) 「川添登オーラル・ヒストリー 2009年4月3日⁴⁾」 話し手 川添登 インタビュアー 中谷礼仁・鷺田めるる

日本オーラル・ヒストリー・アーカイヴ

http://www.oralhistory.org/archives/kawazoe_noboru/interview_01.php

これらは「対談」という形式をとった雑誌記事などである。聞き手側の世代が前者二人と後者二人の間で異なっている点を踏まえて、対談内容を読み解くことで両世代が川添に対して抱いている認識についての共通点が浮き彫りになる。これらの文献内では『新建築』の編集長を務めていた時代についての質問が行われている。川添の『新建築』編集長時代は現評価において重要な位置づけが行われていることがわかる。

この年代は最も焦点が当てられるが、一時代的な評価で終わってしまっている。これら文献を現評価として位置づけし分析することは川添の再評価のための糸口となる。

3. 研究方法・目的

川添の文献をまとめた著書「川添 著作目録 1941.5～1996.12⁵⁾」と川添自身の経歴をまとめた「自分史」にあたる位置づけである著書「思い出の記⁶⁾」を中心に調査、各文献の掲載媒体や相互の関係性調査する。そして、年譜と照合し思想へ影響を与えた人物や根底にあった川添の考えなどを解明することで、川添の思想形成期から再評価を行うことを目的とする。

4. 新建築ジャーナリズム期

川添が『新建築』の編集に関わるようになり始めた1952年から「新建築問題」を経て退職することとなる1957年までの時期の事を指す。「伝統論争」を始め、読者から評論を募集する投書欄の設置などの誌面改革、その中でペンネームを使った建築批評活動を行うなどが川添によってもたらされた。川添が『新建築』において活動を行っていたこの年代が現評価の中で最も注目されている。

1: 日大理工・院(前)・物理 2: 日大理工・教員・建築

5. 思想形成期

川添が『新建築』に関わりを持つまでの 1925 年～1951 年の期間を思想形成期とする。学業面の大筋は早稲田大学ではあるが文転と理転を繰り返すなど学の歩みが緩やかであった。終戦後は子供会の活動を精力的に行っていたことも特徴として挙げられ、組織運営の才能はこの時代に培われていたと言えるだろう。

この時代に出会った人物が後の活動に関して大きな影響を与えていることに注目できる。ここで特に触れておきたいのは「小川信子」と「今和次郎」である。この両者との出会いは川添の思想形成に特に大きな影響を与えている。

小川は卒業研究の幼児施設の研究からかわりを持つことになるが日本生活学会の運営などを通して長く関わりを持つことになる。

川添は今の元で 1 年間師事することになる。「私が先生のお部屋にいた頃、提唱されていた生活学は、いつかは、なんらかのかたちでうけつがなければならないと、心のなかでは思っていたものの、これはなまはんかなことではできない。そのためには二〇年の月日は必要だった。⁶⁾」と川添は述べる。今の提唱する学問の確立を目指した川添は 20 年後に日本生活学会の立ち上げに尽力している。このことから、今との出会いはこの思想形成期の中でも特に注目すべき出会いであると言えることができるだろう。

6. 生活学の視座

晩年の著書「伊勢神宮 森と平和の神殿⁷⁾」の中で川添は自身の視座を次のように説明している。「戦前戦後をつらぬいて現在におよぶ、国民の現実の上にたった学問を総称して「民間学」とよばれているが、私の立場は、この民間学である。⁷⁾」同著内で考現学・生活学についても述べられているが最終的に民間学は考現学を内包するという関係であることを主張している。「考現学入門⁸⁾」において今の述べる考現学を図式化し、川添の視座を加えると下図のようになる。

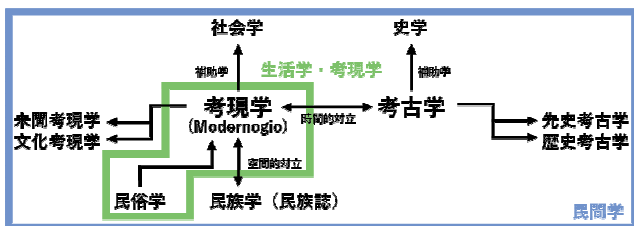


図 1 川添登の生活学・考現学解釈概念図

「民間学」は非常に大局的な言葉であることと、この著書の書かれた年代に注目したい。まず、民間学の

包含関係的に川添の視座は生活学でも考現学でもなく、それらを含んだ更に大きな位置にあることを示している。

7. 結論

川添は思想形成期において、終戦から復興の中で子供会の活動に尽力したことからも既に地域活動に向けた視線があった。その中で、学を進めるにあたって今によって生活学へと視座が拡張された。その視座は日本生活学会の立ち上げに費やした月日からもわかるように、長い時間をかけて研鑽された。そして、晩年の著書で生活学や考現学を含む民間学が自らの視座と述べるようになってきていることから、時間をかけてその視座がより大きなものへ成長していることがわかる。

川添の論述や伊勢神宮等の研究に見られるような学問の領域横断的な特徴は思想形成期によって形作られ、それが新建築ジャーナリズム期の初めに、ペンネームで書かれた投書として現れている。よって、現評価に見られる新建築ジャーナリズム期の一時的な評価は川添の執筆活動としては学問の領域横断的な特徴が発芽した時期であり、そこにだけ焦点を当てるのではなく、そこを出発点とした位置づけを行い評価する必要がある。

8. 参考文献

- 1)川添登 聞き手 藤森照信「戦後モダニズムを振り返る建築の軌跡・丹下健三とその時代」『新建築』新建築社 1998 年 3 月
- 2)川添登 聞き手 大川三雄「仕掛け人としての伝統論争 戦略としてのスター主義」『建築ジャーナル』建築ジャーナル 1995 年 5 月
- 3)話し手 川添登 インタビュアー 中谷礼仁・鷲田めるる「川添登オーラル・ヒストリー 2009 年 3 月 24 日」日本オーラル・ヒストリー・アーカイブ http://www.oralarthistory.org/archives/kawazoe_noboru/interview_01.php
- 4)話し手 川添登 インタビュアー 中谷礼仁・鷲田めるる「川添登オーラル・ヒストリー 2009 年 4 月 3 日」日本オーラル・ヒストリー・アーカイブ http://www.oralarthistory.org/archives/kawazoe_noboru/interview_02.php
- 5)70/70 の会 「川添登著作目録」ドメス出版 1997 年
- 6)川添登 「思い出の記」ドメス出版 1996 年
- 7)川添登「伊勢神宮 森と平和の神殿」筑摩書房 2007 年 1 月
- 8)今和次郎著 藤森照信編「考現学入門」筑摩書房 1987 年